C 年顕現後第 1 主日・主イエス洗礼の日　ルカ 3 章 15―16・21―22 節

［直訳］

15 だが待ちつつ　民は
そして　考えつつ　すべての者が　　彼らの心において　ヨハネについて、
もしかしたら　彼は　ある　キリストで、
16 答えた　言いつつ　すべての者に　ヨハネは、
「私は　確かに　水で　洗礼を授ける　あなたがたに。
だが彼は来る　もっと力のある方が　私より、
その方の　私はいない　適して　解くのに　彼のサンダルのひもを。
彼は　あなたがたに　洗礼を授けるだろう　聖なる霊において　そして　火に。」

21 だが起こった　洗礼を受けることにおいて　すべての　民が
そして　イエスが　洗礼を受けて　そして　祈りつつ
開かれることが　天が
22 そして　降ることが　聖なる霊が　姿形を持った　形で　鳩のように　彼の上に、
そして　声が　天から　起こることが、
「あなたは　ある　子で　私の　愛するもので、
あなたにおいて　私は喜んだ。」

［新共同訳］

15 民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。16 そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。」

21 民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、22 聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

①構成

ⓐ 15―16 節

㋐ 10―14 節では洗礼者ヨハネが「群衆や徴税人や兵士」の質問に答えて、彼らの行うべきことを教える。15 節では「群衆（オクロス）」ではなく、「民（ラーオス）」が用いられる。「民」は「待っている」人々である。原文には目的語はないが、新共同訳やそのほかの邦訳は「メシアを待ち望んでいて」と訳す。この「民」が 21 節にも登場する。

㋑「すべての者」はヨハネをキリスト（メシア）ではないかと考えている。彼らの考えに対してヨハネは「だが彼は来る、私よりもっと力のある方が」と告げる。

㋒16節二行目の文頭に置かれた代名詞「私」は強調である。五行目冒頭の「彼は」と明らかに対応している。五行目との対比は他にも、現在形の動詞「洗礼を授ける」と未来形の動詞「洗礼を授けるだろう」にも見られる。また「水で」と「聖なる霊そして火において」にも見られる。「水で」には五行目のような前置詞「おいて」が使われずに、単純に与格形が使われているにすぎない。「水で」はただ洗礼の手段を表しているのだろう。従って、前置詞を用いる五行目は手段以上のものを表す。

ⓑ21―22節

㋐「すべての民」が洗礼を受けるとき、イエスも洗礼を受けて祈る。15―16節ではメシアを巡って「民とヨハネ」の考えが示されているが、21節ではヨハネが告げた「もっと力のある方」であるイエスが民と共に洗礼を受ける。そのイエスに天が応える。

㋑洗礼を受け、祈るイエスに聖霊が降り、イエスは神の愛する子であることが告げられる。

②民と洗礼者ヨハネ（15―16節）

ⓐ「民（ラーオス）」はルカ 1 章 17 節では次のように用いられている。

彼（洗礼者ヨハネ）はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。

この用例に示されているように、ルカ福音書での「民」は「救いを受け入れる準備のできた民」を指している。洗礼者ヨハネのもとに集まってきた人々は、7・10節では「群衆」と呼ばれていたが、15節以下では、「民」と呼び換えられている。徴税人や兵士を含む雑多な群衆は、洗礼者ヨハネとの対話を通して、彼から具体的な指示を聞いて、救いを受け入れる「民」へと整えられてゆく。

ⓑ直訳の15節一行目に「だが民は待ちつつ」とあるが、原文には「メシア」という目的語はない。「メシアを」と断る必要がないほどに、民のメシアへの待望はふくらんでいる。また「待ちつつ」は現在分詞形である。ルカは目的語を省略した現在分詞形を使うことによって、洗礼者ヨハネの説教が彼らの心に「終末への期待」を芽生えさせ、それがますます大きくなってゆく様子を表現しようとしている。

ⓒ「待ちつつ」によって洗礼者ヨハネが民の間に巻き起こした興奮を表し、「考えつつ」によってその興奮をさらに詳細に描いているのだろう。民のメシアへの待望は、目の前のヨハネこそがメシアではないかという期待となって人々を一つの民へと結び合わせる。直訳の「ある」が可能性を示す希求法であるなら「もしかしたらヨハネがメシアではありはしまいか」の意味になる。「心において」はヘブライ語的な言い回しである。単に思考が繰り広げられる場所を表しているのではなく、その思考が意図的な、意識を集中したものであることを表す表現である。

ⓓ「民」に変えられた人々に洗礼者ヨハネは語りかける。それをルカは「すべての者にヨハネは答えた」と表現している。マルコの並行箇所（一7）では「彼（ヨハネ）は宣べ伝えた」と述べるだけで、「民」という言葉も、「すべての者に」という言葉もない。この表現の違いは偶然ではなく、ルカの考えを反映していると思われる。ルカはこれらの語を加えることによって、そこに迫っているまったく新たな救いの持つ普遍性を述べようとしている。その新たな救いからはずれる者はだれもいない。

ⓔルカにとっての救いは、ある個人やグループに留められずに、全世界へと拡大し、すべての人をおおい尽くす力である。従って、ここでの「すべての者」は物語に登場する「民」を指すと同時に、やがて「民」となる全人類をも視野に入れた表現である。洗礼者ヨハネの前に馳せ参じて「民」とされた群衆に働きかけた力は、やがて全世界に満ちることになる。これが、マルコとは違って、「すべての者に」と書くルカの意図である。救いは外へと向かって拡張する力に満ちている。群衆を「民」に変えたこの力は、民を「待っている」者にしてしまう力でもある。「待ち望む」ことこそが神を信じる者の特徴である。

ⓕ16 節三行目では「彼は来る」が強調されている。ヨハネの後に来る方は「もっと力のある方」である。その方は「聖なる霊と火において」洗礼を授ける。ヨハネは「水」で洗礼を授けるが、それは「悔い改めの洗礼」（三 3）であり、「主の道を整える」（三 4）ための準備にすぎない。「聖なる霊と火」における洗礼は、個々人を対象とする洗礼ではなく、すべての者を含み込む「聖霊降臨」という出来事を指すと思われる。メシアを通して引き起こされる救いの出来事は、すべての人々を新しい段階へと招き込む力であり、洗礼者ヨハネの使命は、民の期待をこの方へと向けることにある。

③イエスの洗礼（21―22 節）

ⓐ「だが起こった　洗礼を受けることにおいて…」はルカの好む構文である。この構文は段落の冒頭や物語の頂点に使われる。このような荘厳な言い回しを使うことによって、悔い改めの洗礼を宣べ伝えた洗礼者ヨハネから、神の子であるイエスへと時代が受け継がれ、新たな時代が開始されたことの意義に注意を向けさせようとしている。

ⓑ21―22 節はひと続きの文章であり、意味は「すべての民が洗礼を受けたときに、また、イエスが洗礼を受けて、祈っている間に、天が開かれ、……聖霊が降り、天から声が起こるということが起こった」となる。民とイエスの洗礼について述べる 21 節二行目までが従属文、神の応答を述べる三行目以下が主文となっている。このような構文から考えると、ルカは 21 節の洗礼そのものよりも、むしろその後に起こった聖霊の授与と神の声に強調点を置いていると思われる。

ⓒルカはマルコとは違って、イエスに洗礼を授けたはずのヨハネの名を書かない。また、ルカは洗礼という出来事そのものではなく、イエスが民と共に洗礼を受けたという事実に目を向けさせようとしている。救いを待ち望む「民」が洗礼を受け、そして「イエスも」共に洗礼を受けたのは、イエスが「民」と一つに結ばれて救いへの道を共に歩み出すためである。ここでイエスはまず「祈り」をささげている。祈りとは神との関わりを求めることであり、イエスはいわば民を代表して神との交わりを求めている。「祈りつつ」は現在分詞であり、動作の継続を表している。イエスは民と共に洗礼を受け、「祈り続けている」と、天が開けて、声がする。ルカが書きたかったことは、天が開けて起こった出来事の意義である。

ⓓ「願う（パラカレオー）」は主としてイエスに向けられるが、「祈る（プロセウコマイ）」は神に向けられる。祈りは神との間に生じた関わりを表す。イエスは「祈るためにひとり山に登り」（マタ一四 23、マコ六 46）、「人里離れた所へ出て行って、祈る」（マコ一 35）が、これはイエスが神との静寂な交わりを大事にしていたことのしるしである。この交わりの中で、自らに課せられた使命を知り、それに従う力を獲得している。イエスの祈る姿を見て弟子はその重みを学ぶ。「祈る」イエスを特に強調するのはルカである。ルカによれば、イエスは洗礼の時にも（三 21）、十

二使徒を選ぶ時にも（六 12）、変容の時にも（九 29）、主の祈りを教える時にも（一一 1）、祈っている。

ⓔこの祈りに応えて、天が開かれる。それはイエスの祈りに対する神の応答であるが、その内容が 22 節では、視覚と聴覚の両面から明らかにされる。まず聖霊が「鳩のように姿形を持った形で」イエスの上に降る。「姿形を持った形で」という表現はマルコの並行箇所（一 10）にはないから、ルカは聖霊の降下が客観的な事実であることを強調しようとしている。また、聖霊が「鳩のように」と形容されるが、鳩を聖霊のシンボルと明確に述べる文書は、新約聖書以前には見あたらない。だが、旧約聖書での神の霊はものを創造する力として、あるいは預言をさせる力として現れるので、ここでの霊もこの意味に取るべきである。イエスの宣教が開始されるにあたって、霊がイエスに降る。その霊が鳩の姿で具象的に描かれる。

ⓕ続いて天からの声によってイエスが誰であるかが明らかにされる。この声は、「あなたは私の愛する子である、あなたにおいて私は喜んだ」と直訳することができる。この背後には第二イザヤが歌った主の僕の歌（イザ四二 1）が響いている。

見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。
わたしが選び、喜び迎える者を。

この歌は、人々の罪を背負って神に執り成す主の僕の姿（イザ五三 12）へとつながる。イエスが救いを待ち望む民と共に洗礼を受けたのは、罪の重荷に悩む民のもとに身を置くためである。このようなイエスの姿に、神は天を開き、喜びの声をもって応じる。こうして地上と神とがひとつになる。

④天が開かれ、聖霊が降り、声が起こる

ⓐマルコは洗礼者ヨハネがイエスに洗礼を施したと明記するが、ルカは「イエスが洗礼を受けて」と書くだけで、誰が洗礼を施したのか何も述べない。その代わりに、マルコとは違って、民に続いてイエスが洗礼を受けたことを述べる。ルカにとって大事なのは、イエスに洗礼を施した人物なのではなく、イエスが民と共に洗礼を受けたことである。この「民」は洗礼を求めて洗礼者ヨハネのもとに来て、「待ち望む」者となった民である（15―16 節）。

ⓑイエスは民と共に洗礼を受けることによって、洗礼者ヨハネのもとに集まった民をヨハネから託され、引き継ぐ。そのイエスは「祈る」イエスである。イエスは民を代表して、神との交りを求める。民を託されたイエスが祈っている間に、「天が開かれ、聖なる霊が降り、声が起こる」という出来事が起こる。ルカが書きたかったことはこの出来事である。まず、天が開かれる。これは祈るイエスに対する神の応答である。祈りに応えて天が開かれると、聖霊がイエスの上に降って来る。

ⓒ開かれた天からは声が起こり、イエスが誰であるかが、明らかにされる。それが明らかにされたのは、イエス自身のためでもあり、イエスに託された民のためでもある。イエスは神に愛された子である。しかも、第二イザヤの述べる、神の心に適った主の僕が、神に従って苦しみを受け、すべての人々の罪を背負って、神に取り成しをしたように、イエスも神の心に適った者として振る舞う。イエスが民と共に洗礼を受けたのは、イエスと共に「私の愛する子」と呼ばれる希望をすべての人に与えるためである。